がんはなぜ再発するの？

“手術でがんは取りきれました”あるいは“化学療法や放射線治療でがんは消えました”と言われた場合、患者さんの多くは“がんが治った”と感じることと思います。実際は“検査で検出できる大きさのがんがなくなった”だけで“身体から全てのがん細胞がなくなったわけではありません。コンピューター技術の進歩に伴い画像診断の精度も向上しましたが、がん細胞一つ一つの大きさは顕微鏡でみなければわからないほど小さなものであり、顕微鏡レベルの大きさのものは画像では検出できません。画像以外の方法でがんの存在を感知する方法として血液検査による腫瘍マーカー測定というものがあります。これはがんがあると血液中に出現する特定のタンパクなどを測定することにより、がんの有無を判断する方法で、がんの種類によって測定するマーカーも変わります。前立腺がんの PSA のように非常に感度や特異度の高いものもありますが、多くの癌腫（がんしゅ）のマーカーでは顕微鏡レベルのがんの存在を同定できません。これらのことから顕微鏡レベルの”がん“が残存していても医師もそれを完全に把握する事はできません。こうして残存した”顕微鏡レベルの大きさのがん“が細胞分裂を繰り返して検査で検出できる大きさまで育つと”がんが再発した“と診断されます。

“治療後にがんが残存しているかどうか医者にもわからない”と言われると不安になるかもしれませんが、がんの種類、治療開始前のがんの進行度、治療の完遂度などから“がんが残存している可能性”を判断する事は可能です。ここで“がんが残存している可能性が高い”と判断された場合に補助療法として薬物療法や放射線治療が追加されることになります。
全ての予定された治療を完遂できた場合でも、最終的に“がんが根治できた”と判断するにはある程度の期間が必要で、この期間が経過観察期間と呼ばれており多くの癌腫では 5 年程度が目安とされています。
治療も終わって症状もないのに長いこと（最低 5 年）病院に通わなければいけないのはこういったことが理由としてあるからです。自己判断で通院を止めてしまわないようにお願いします。

若い時代に恩師から頂いた “治療した患者さんが元気で外来に来てくれるのが医者にとって一番のご褒美だ”という言葉が、年を経て実感できるようになってきました。
皆さんも元気な姿を主治医にみせてあげてください。

【放射線科診療部長　村松　博之】